

Q10

ゼミにちょっと変わった男子学生がいます。大講義では最前列に陣取り、熱心にノートを取っているのに、今どき珍しい真面目な学生だと思っていましたが、ゼミでは全く他の学生たちと話をせず、いわゆる浮いている状態です。一度、授業であてたときは長々と見当違いの自説を述べたのでそれとなく注意したら、翌週は無断欠席でした。今後指導上で気をつける点を教えてください。

A10

このような学生は、**発達障害**やその特性をもっていることが想定されます。2005年の発達障害者支援法施行以来、大学においても支援の体制が整備され、今日では教職員の理解もずいぶんと進んできました。発達障害には、大きく分けて、「ASD（自閉スペクトラム症）」「ADHD（注意欠如・多動症）」「SLD（限局性学習症）」があります。生まれもった脳機能の偏り（障害）であり、基本的な特性は生涯変わらないと考えられています。

これらの学生は、教室や、サークル、教務部などの事務窓口、人と関わることの多い実習先やバイト先などで変わった言動をしてトラブルを起こしがちです。トラブルの原因は、人とのコミュニケーションがうまく取れないことにあります。相手の反応を見ずに自分のことや関心のあることを一方的に話したり、比喻や洒落、冗談が理解できず、軽口やウソや愛想を言うことができません。自分が心を寄せる相手（異性）から「友だちでいようね」といわれても、言葉をそのまま受け取ってしまい、ますます近寄って嫌がられたり、禁煙場所で喫煙する学生を大声で注意して喧嘩をし、パニックになったりします。その一方で、いったん興味をもった事柄には驚くべき集中力を見せ、その専門的知識や記憶力、描写力などは常人には真似できないほど優れていることもあります。

発達障害の特性がある場合、コミュニケーションの苦手さは、社会生活全般に影響します。例えば、実習グループでは集団での自分の役割がよくわからず、いつも後片付けをすることになり、自分が除け者にされたと感じる被害感を募らせたり、お気に入りのアニメキャラクターを軽くからかわれただけで、憤慨して立ち去ったりしてしまうこともあります。その場の雰囲気や文脈を読まずに思い込みで行動することが多く、他人からは協調性がないと受け取られてしまいます。

このような特徴が明らかであるとき、彼らの言動がこのような障害や特性によるものと理解することが大切です。トラブルが重なると彼らは孤立感を深めてそのままひきこもったり、被害感や攻撃心を強め、怒りの感情をコントロールできず、暴力的になることも起ってきます。そのような事態に至らないよう、日常的な配慮と個別の支援が大切です。まずは、その学生の得意と不得意の特徴を知り、学生本人が「困っている」点は何かに焦点を当て、一緒に解決していこうとはたらきかけてみてください。

すでに本人が医療機関で診断を受けていて（障害者手帳を取得している場合もあります）、学生本人や保護者から修学支援の申請希望があるときは、修学支援コーディネーターが中心となり、合理的配慮の検討が行われますので、学内の YOU ステーションを紹介してください。また、本人からの申し出がなくても、周辺の教職員がその疑いを持ち、支援の必要性を感じる場合は、それに準ずる対応をしていきます。これらの学生は、学業には問題なく取り組めても、就職活動の段階で大きく躓く場合が多いので、支援の開始は早いに越したことはありません。

対応の留意点としては、指示は明確に、助言は具体的に、できれば紙に書くなど後から確認できるようにし、もしうまく対応できなくても感情的に叱責せず、なぜいけなかったのか、今後どうすればよいのかを論理的に伝えていくとよいでしょう。情緒的な交流に難しさはあっても、これらの学生は総じて純粋で、真面目なので、教職員が細やかに連携して対応することは、トラブルを起こしがちな彼らの学生生活の確かな支えとなるでしょう。